

《シリーズ ケアをひらく》 『中動態の世界——意志と責任の考古学』 「能動的な学び」の 価値観に一石を投じる

著：國分功一郎／定価：本体 2,000 円＋税
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



能動的な学習者を育てる、という言葉が盛んにいわれている昨今、私は、能動と受動といった二項対立の枠組みとは異なる、もう少し自由な学習者のとらえ方があるのではないか、というジレンマに陥っていたことがある。なぜ、安易に学習者を二項対立の図式にあてはめようとするのか。

能動と受動の対立、つまり「する」が「される」かの対立には意志と責任の概念が存在し、これが善か悪かの二項対立の判断基準になるという。学習においては、能動的な学習者が意志と責任を担う善で、受動的な学習者が悪とされる。

しかし、この本はそこに疑問を投じる。「強制ではないが自発的でもなく、自発的ではないが同意している」という事態は、看護基礎教育の現場にも、臨床の現場にも、ありふれている。「それが見えなくなっているのは強制か自発かという対立で、すなわち、能動か受動かという対立で物事を眺めているからである。そして能動と中動態の対立を用いれば、そうした事態は実にたやすく記述できるのだ」と著者は語りかける。

では、中動態とは何か。著者は中動態の起源から歴史的な背景と変遷を紐解き、迫っていく。言語学者バンヴェニストによると、能動と受動の対立においては、するかされるかが問題になるのであるが、能動と中動態の対立においては、主語が過程の外にあるか内にあるかが問題となる。

この考え方をもとに臨地実習における学生とのかわわりを例に挙げると、学生は、対象者との間でさまざまに揺れ動く相互作用プロセスの内に存在しているため、臨地における学生は中動的に存在しているとも考えられる。つまり、臨床の現実に圧倒され、自分からは手も足も出ないように見える学生であっても、まちがいなく看護という相互作用のプロセスのなかにいるのだ。中動的な存在である学生というとらえ方は、プロセスの外側から学生に能動的であることを強いる教員に疑問を投げかける。一見すると教員の答えを待っているだけの受動的に見える学生ではあっても、中動的にそのときその場に存在するなかで学びを得ているのだ。こうした新たな学習者観をもつことは、形式だけの能動を強制せず、ゆるやかに学び続けることを可能にするのでないだろうか。

これは、自らの看護実践における対象者との相互作用や、日常の学生とのかかわり、学習者のとらえ方などにも通じるであろう。私自身が生きるあらゆる過程の内において、中動態の世界はとても自然だ。この世界を知ること、自由に近い、自分自身を解き放つ素敵な発見であると私は感じている。